

## かすかな記憶—夏・秋・冬

公益委員 采女博文

“元気を出そう”と自分にも周りの人にもうまく伝えられない労働委員会委員3年目の秋。働く場がないのは困る。結婚や子育てをためらう賃金では困る。職場に向かう足取りが重い環境では困る。

近頃、昭和30年代後半の国分平野(現在、霧島市)の農村風景を思う。テレビも洗濯機も冷蔵庫もない。外食もない。旅行もない。何もない。荷車を引いて国分平野を渡る。孫が見た祖父母が生きた重労働の世界である。

高度経済成長が始まった時代である。でも、その恩恵が農村へ波及するのはずっと遅れた、と思う。

### 夏。迎え火と送り火

日が落ちかけたころ、家の門口に小さな火を焚く。墓参りに行く。行き交う道は提灯の明かりが揺れ、線香の匂いでいっぱいだ。

仏壇の前には、いつもより豪華なお膳があった。ご飯、汁物、漬け物、酢の物、煮物がちょびっとずつ。同じものが2つあった。“どうして2つあるの”と祖父に聞いたことがある。“1つはご先祖様の分、もう1つは、ご先祖様が友達を連れてくる。もう迎えてくれる人がいない友達を連れてくる。”

その頃、若い兵士姿の遺影がひっそり掲げられている家があった。2つの遺影がある家があった。家は絶えるのである。

2膳について、ネットで調べると、「普通は2膳用意します。仏の世界と衆生の世界です」、「ご本尊用とご先祖用の2組」とか仏教行事ふうの説明がされている。祖父のような説明は見当たらない。祖父は昔話の名手だったから、孫相手に適当に話を作ったかな。祖父の寝物語には、動物との友愛の話、友との助け合いの話が多かったし。昭和30年代は戦争と農地改革の嵐からさほどの時が流れていない。たぶん昔話は孫への伝言だったのだろう。

墓へのお供えの“しんこだんご”もおいしかった。衛生観念もないので、そのまま食べていた。醤油とか砂糖とかをまぶして食べた記憶はない。仏壇にも、お金のかかるお供えなどはなかった。せいぜい、らくがん、があっただろうか。らくがんは、ぶっきらぼうな形と味だった。今、盆の時期に店頭に並ぶらくがんは豪華絢爛である。

### 収穫の秋

稲作は集団での作業だった。稲刈りは鎌での手作業だった。木で組んだ脚に長い竹を掛け、稲を干す。そして足踏みの脱穀作業。重労働だったろう。

いつもより少しだけ華やいでいた。黒砂糖が出た。いつもは沢庵だった。砂糖は、現金を出して買うぜいたく品だった。その時、気がつかなかった。

田んぼの草取り。草取り機を押して土をかくはんしながら、草を抜いていく。ヒエ

(稗)は抜いても抜いても生えてくる。ヒエは飢饉に備える救荒作物らしい。ヒエは当時すでに雑草の扱いだっただろう。もう、ヒエと稲とを見分けることはできない。

多品種少量の作付けだった。自給自足だったのか。水稲、陸稲、大麦、アワ、からいも、大豆、小豆……大雨の年、日照りの年……年ごとの天候の変化に耐える、飢餓を避けるためだったのか。日照りの年は水田の水の管理は大変だった。

最近の稲は丈が奇妙に短い。稲わらの利用価値がなくなったからだろう。わらで縄やむしろを夜なべ作業で編んでいた。馬の餌や敷きわら、堆肥にされた。

年の瀬。正月。

昭和30年代の農村地帯。年末の餅つきは賑やかだった。親戚数軒分をつく。うすと杵、男女で共同で作業する。声を掛けあって、こねる、つく。納屋の片隅にあったうすが庭に引き出されて、水で洗われる。掛け声が聞こえる。孫が手伝うと、もろふた(麴蓋)に並べられた餅はふぞろいになった。笑い声が聞こえる。

鏡餅。正月明け。カビの匂いがする甘いぜんざいを思い出す。

“何もない”“何もなくても大丈夫”と心の奥でたのむところがある。でも、自給自足の時代には戻れるはずもない。“何もない”では次世代は絶える。次世代を育てるためには、健康で文化的な生き方、働き方ができる社会でなければならないだろう。生産性向上という呪縛はあっても、企業もゆっくりと変わりつつある。次世代育成支援対策推進法(平成15年に10年間の時限立法として成立したが、平成26年に、平成37年3月末まで延長された。)の下で、鹿児島でも「くるみんマーク企業」(平成29年5月現在で32社、鹿児島労働局)、「子育て応援企業」(平成29年9月現在で400社、県雇用労政課)も順調に増えている。